

『イーリアス』における怒り・再考

生田康夫

はじめに

周知のように『イーリアス』の主題は「怒り」である。

「怒り (Eros) を歌えムーサよ、ペーレウスの子アキレウスのおぞましい(怒りを)」

(『イーリアス』第一歌1〜2)

『イーリアス』はこう歌い出されており、冒頭でこの詩編の主題は怒りであると詩人自身が宣言している。これは、周知の事実であるだけにあまり驚かないが、実は尋常ならざることではないだろうか。人類最古のそしてしばしば最高とされる詩編

の主題が「おぞましい怒り」を主題にしているとは。

もう一つの詩編『オデュッセイアー』の冒頭はこうなっている。

「男を語れムーサよ、策略に富んだ、諸方を彷徨った男を」

(『オデュッセイアー』第一歌1〜2)

傑出した勇士を叙事詩の主題とすることに何の不思議もない。それに対して『イーリアス』の詩人はあえてアキレウスの怒りを、「怒り」という感情を、主題として提示している。それは何故か。それを改めて考えてみたい。本稿では、この問いを念頭におきつつ『イーリアス』における「怒り」の諸相を吟味していくことにしよう。それがこの詩編の特質に光をあてることにもなることを期待しつつ。

A. 怒りを表すことば

『イーリアス』において怒りを表す語は実に多彩である。

冒頭の「怒りを歌え」の怒りは *μήνις* (憤怒、瞋恚) だった。『イーリアス』で他に怒りの感情を表すものとしては以下の語がある。語義の広がりやニュアンスに差異はあるがいずれも「怒り」の語義を含む単語だ。

kótos / *ménos* / *mhvthos* / *vémos* / *χόλος*

以上は名詞だが動詞で「怒る」の語義を含む単語も沢山ある。

koréw / *meveaiwá* / *mhvía* / *atroimhvía* / *veheosáw* /
okúrosaiat / *χolothaiat* / *χúrosaiat* / *tepiwáousaiat*

これらから派生した形容詞や分詞は枚挙にいとまがない。

他にも「機嫌を損ねる」等の語義の類義語もあるが割愛する。ただ怒りに関連してもうひとつ見落とせないのは *próopa ídion* (睨みつけ) という語句だ。これは直接的に「怒り」や「怒る」を意味するわけではないが、怒りの表情あるいは仕草を表す副詞句で、直訳すれば「下から見ながら」となる。怒りの様が髣

髴とするような喚起力に富んだ表現だ^{註1}。

これらの語は『イーリアス』中で繰り返し返し出してくる。たとえば *μήνις* は (その変化形も含めると) 十二回使われ、*χóλος* にいたっては四十九回である^{註2}。『イーリアス』を読んでいると怒りに満ち満ちているという印象を持つが、無理もない。

B. 怒りとは何か

怒りとは何か。ここに『イーリアス』の中のアキレウス当人のことばがある。

「諍いが、そして怒り (*χóλος*) が神々と人間とから消え失せればよいのに。怒りは思慮深い者をもそのかして凶暴に振舞わせる、それは融けて滴る蜜よりもはるかに甘く、人の胸の中に煙の如く沸き起るのだ」
(第十八歌 107 ~ 110)

自分が怒りに身をまかせたことで僚友バトロクロスを失う結果になった、そのことを悔いるアキレウスの述懐だ。ここには怒りの本質が簡潔に抉り出されている。即ち、それにとらわれる者の「思慮を奪い」「凶暴に振舞わせる」。それは「甘く」抗

しがない欲望でさえある。

怒りは人間の心にあってもっとも動物的な感情といえるだろう。なればこそ怒りの比喩に動物が出てくる。

まず獅子の怒りがある。

「さながら鬘も見事な(親)獅子が狩人の男に繁った木叢からその子を奪われて、後で来て嘆き、沢山の谷間をめぐり男の跡を訊ね行く、なんとか見つけ得ないかと。激しい怒り(Yoloyoloy)に捉えられているのだ」(第十八歌 318～322)

これはパトロクロスを失ったアキレウスの嘆きと怒りの比喩だ。

蛇の怒りも出てくる。

「あたかも蛇が猛毒を含んで山中の穴で人を待ち受けるように。恐ろしい怒り(Yoloyoloy)が彼に入り込み凶暴な眼で睨みつける、穴でとぐろを巻いて」(第二十二歌 93～95)

ヘクトールがアキレウスを待ち受ける描写における比喩である。

動物は笑わないし、涙することはないかもしれない。しかし怒ることにおいては人間と同じである。人が持つ様々な感情の中で怒りほど動物性を残しているものはない。怒る人は動物の、

それも獅子や蛇といった獠猛な種が怒ったときの獣性を示しているというべきだろう。

C. 誰が怒るのか

当然アキレウスは怒る。しかし、怒るのはアキレウスだけではない。他の武将たちも怒る。神々も怒る。この項ではアキレウスの怒りを見る前に他の者たちの怒りを見てみよう。

「人間の怒り」

a アガ멤ノン

最初からアガ멤ノンは喧嘩腰である。第一歌早々、娘の返還を請いに来た祭司クリュセースに対し昔立ってこう応ずる。

「しかしアトレウスの子アガ멤ノンの気に入らなかつた、手荒く追い返し乱暴なことを投げつけた。『爺さん、俺様が空ろな船の近くでお前と出くわさないようにしろ、いまぐずぐずしていたり、後からまた来たりして』」

(第一歌 24～27)

そして鳥占師カルカースの御告げの場面が来る。獲物として

得た女を返すべしという自分に都合の悪い御告げを聞いてアガ
テムノーンは怒る。

「二座の中に広く統べるアトレウスの子アガテムノーンが
憤然として立ちあがった。胸の内は怒りで(ἤραξις)黒々
と膨れ上がり、両眼は燃え盛る炎のようであった。カルカー
スをまず憎々しげに睨みつけ言った」(第一歌101～104)

御告げに従って返すべしと主張するアキレウス、それにしぶ
しぶ応じたもののその代わりにアキレウスの得た女を取り上げ
ると言い立てるアガテムノーン、この二人の諍いが続く。そし
て、怒ったアキレウスが戦線離脱を宣言すると、アガテムノー
ンの方も怒り続ける。

「ペーレウスの子アキレウスはこう言って、金鎧を打った
錫杖を地面に投げつけ座った。こちらではアトレウスの子
アガテムノーンが怒り続けていた(enlyve)」

(第一歌 245～247)

傲慢で短気なアガテムノーンの怒りと激情型のアキレウスの
怒りの衝突である。

b ヘクトール

家族思いで温厚なイメージのあるヘクトールも怒る。

弟パリスに怒る。自ら挑発して一騎打ちに誘っておきながら、
相手のメネラーオスを恐れ自軍の群の中に逃げ隠れたパリスに。
彼に対する次の叱責には、怒るといふ語こそないものの、弟の
懦弱な振舞いに対する強烈な怒りが読み取れる。

「ろくでなしのパリス、格好ばかりの女たらしよ、口先男よ。
お前など生まれてこず娶ることもな死んじまうべきだった
のだ」(第三歌39～40)

また、集会において意に沿わない僚友の忠告に対しこうこた
える。

「彼を睨みながら(ἰτροδπα ἰδών)兜煌めくヘクトールは
言った。『プリーユダマスよ、お前の言うことは全く気に
入らぬな。もう少しはましなことを考え、述べられないの
か』」

(第十二歌 230～232)

戦場では勿論怒る。味方の勇士が殺されて怒る。

「トロイア勢はダナオイ勢目指して襲いかかった、彼らの
先頭にサルペードンの死に怒って(ἔχολυενοσ)ヘクトール

が立った」(第十六歌 552～553)

そして

「槍は楯から遠く外れていった、ヘクトールは怒った
(*Yūtoro*)、素早い槍が彼の手から無駄に放たれたので」

(第二十二歌 291～292)

と、敵を討ち損ねても怒る。

c パトロクロス

優しさを讀えられるパトロクロスとても例外ではない。パトロクロスは討たれた時、仲間に

「さあ皆パトロクロスの優しさを思い起こしてくれ。生きている間、誰に対しても優しく接することを知っていたその彼に今、死と運命が襲ったのだ」(第十七歌 670～672)

といわれる男だ。しかしそのパトロクロスも怒る。

「そのように、馬を駆るパトロクロスよ、お前は真つ直ぐに迫ったな。リュキエー勢やトロイア勢に、僚友の死を怒って (*kyōkūto*)。そしてイタイメネースの子ステネラーオ

スの首を石で撃ち首の髄を断ち切ったのだ」

(第十六歌 584～587)

パトロクロスの怒りに関して見落とせないのは彼自身の次の述べである。これは亡霊となってアキレウスの枕元に立ったパトロクロスが、自分の骨をアキレウスのそれと同じ壺に納めるよう計らってほしいと頼む場面だ。

「私をあなたの骨と別のところに置かないでくれ、アキレウスよ、一緒にしてくれ、ちょうど幼い私が、父メノイティオスによってオポエイスからあなたのところに連れられてきて、あなたの屋敷で一緒に育ったように。それは、私が愚かにも賽遊びで怒って (*Yūaberu*) アンピタマースの子を、そのつもりはなかったのだが、殺した時だった」

(第二十三歌 83～88)

パトロクロスにはそのような怒りの原罪ともいえるべき過去があった。後の彼の優しさはそこに起因しているのかもしれない。しかしその彼にして上に見た如く戦場において怒りとは無縁であり得なかった。

d パリス

パリスの怒りについて謎めいた一節がある。

「何たる奴だ、そのような怒り (χολω) を胸に抱くとは見苦しいぞ。町や聳える城をめぐって戦う兵士らは命を落として、お前の故に喚き声や戦鬨が町の周りで燃え盛っているというのに」(第六歌 326～329)

パリスがメネラーオスとの一騎打ちの場から逃れて、こともあろうに闘事にかまけたあげく、のんびりと武器を磨いている。そのパリスを咎めるヘクトールのことばである。そもそも一騎打ちがパリスが言い出したものだ。そしてメネラーオスに圧倒されもはやこれまでというところを逃れ出たのだ。(自らの意志で逃れたのではなくアプロデーテーに助け出されたのだとはいえ) 恥ずかしくて悪びれているというのならまだしも、「怒りを胸に抱く」いわれはない。その権利もないし資格もない。そんなことが言えた義理かといいたくなる。

もつとも、パリスはその後ヘクトールにこたえて「怒り」を否定してはいる。

「私はトロイア人達への怒り (χολω) や恨みから部屋に籠っているのではない。それより苦悩を嘔みしめたいと思っただけだ」(第六歌 335～336)

「苦悩を嘔みしめたい」など駄目男の面目躍如といったところだが、それはさておき、ヘクトールはなぜパリスが怒っている

などと考えたのか。どうもここは詩人のあまり語らない事情がありそうだ。

その事情というのはトロイア人たちのパリスに対する非難である。自分たちが戦争に巻き込まれたのはパリスの軽はずみな行為のせいである。元凶であるパリスに対する非難の気持ちは当然でありトロイア人達の心の中でさぞ渦巻いていたと想像される。しかし、我々が眼にする『イーリアス』においては、それほど表立ったものとして描かれていない。

たしかにそういう心情の存在を垣間見せる場面がないことはない。そのひとつはパリスが一騎打ちの場から姿を消した後、それをメネラーオスが探し回る場面である。

「だがトロイア勢や音に聞こえた援軍の誰も、軍神の伴メネラーオスにアレクサンドロス(パリス)を示し得なかった、もし見つけたなら誰も好意から匿ってやりはしなかつたらう」(第三巻 451～453)

もうひとつは、アカイア側への使者にたったトロイアの伝令が洩らす独自にみられる。この使者はパリスの示す和議の条件をアカイア勢に伝えに来たのだ。

「アレクサンドロス(パリス)がトロイアへとうつろな船で運んできた限りの —— 全くその前に死んでしまえばよ

かったものを——その限りの財宝の方はすべて返す、更
に家から余分につけたしたいとの意向だ。だが名の高いメ
ネラーオスの奥方の方は返すことはならないという——
トロイア人たちはそうせよと勧めるのだが——

(第七歌 389～393)

このように非難の心情は心中描写や独白に現れるだけであり、
パリスに面と向かって発せられる場面はない。それどころかト
ロイアの老人達のヘレネーについての次のような驚くべき言葉
さえ紹介されている。

「全くトロイア人と脛当てよきアカイア人とが長い間、こ
れほどの女のために苦難を嘗めてきたというのは無理もな
いことだ。その姿は恐ろしいほど不死の女神に似通うてお
る」(第三歌 156～158)

もつともこれには

「しかしながら、これほどの女であつても船に乗せて返す
がよからう、我々の子孫に後々禍根を残さぬためにも」

(第三歌 159～160)

ということばが続くのだが。

それにしてもパリスのトロイア人に対する怒りを正当化する
に足るほどの表立った非難、面罵は『イーリアス』に見当たら
ない。なぜか。

『イーリアス』以前に「アキレウスの怒り」の物語に類した「パ
リスの怒り」の物語があつたのではなからうかという説があ
る^{註3}。パリスがメネラーオスの妻を奪う。それが戦禍を惹き
起す。トロイア人達は口を極めてパリスを面罵する。それに対
してパリスは怒る。戦線離脱する(アキレウスのように)。ア
キレウスがトロイアを陥落寸前まで追い詰める。パリスが再び
立つて弓でアキレウスを倒す。トロイアを窮地から救う(それ
もアキレウスの場合のように一時の事ではあるが)。このよう
な筋の「パリスの怒り」の物語である。

しかしながら、このパリスの怒りの主題はアキレウスの怒り
を主題とする『イーリアス』の詩人によつて背景に押しやられ
た。詩人は主題の分裂を避けたのだろう。そうして押しやられ
た物語の痕跡が、先のヘクトールのことばに残されているので
はないかと思われるのである。

e メネラーオス

メネラーオスの怒りについても似たようなことがあり得ない
だろうか。

「アキレウスの怒り」の物語である『イーリアス』において、
メネラーオスの怒りは背景にのいている。しかしメネラーオス

はもともと怒っていたはずだ。トロイア戦争の発端は妻を奪われたメネラーオスの怒りにあるのだから。「メネラーオスの怒り」を主題とした物語は、それが戦いの発端であった以上、『イーリアス』に先行する話としてあったことは大いにあり得る。というのもその痕跡とみなされるものが『イーリアス』の思いもよらぬところに見られるからだ。

それはアポストロフエー（＝頓呼法、すなわち登場人物に対する詩人からの二人称呼びかけ）である。『イーリアス』にはこのアポストロフエーが二十回近く現れるのだが、パトロクロスと並んで群を抜いて多く使われるのがメネラーオスに對してだ（パトロクロス八回、メネラーオス七回）。

例えば、メネラーオスがトロイアの弓の名手に射かけられ危く命を落としそうになる場面である。

「しかし、メネラーオスよ、お前のことを幸わう神はお忘れでなかった」（第四歌127）

命はとりとめたものの胸のあたりを射られ下半身は血塗れとなる。その有様が深紅に染められた象牙に喩えられこう続く。

「そのようにもお前のよく伸びた腿は血に塗れた、脛も、そして下の方美しい踝も」（第四歌146～147）

戦場で傷つき倒れる戦士は枚挙にいとまがないが、二人称でここまで情を込めて語られることは例がない。

『イーリアス』において、メネラーオスはアキレウス、ヘクトール、そして優しさと悲劇的運命で共感を呼ぶパトロクロスなどに比して今一つ輝きの劣る二級の人物であるとの印象がぬぐえない。それにもかかわらず詩人がたびたび親しく二人称で呼び掛けるのはなぜなのか。我々に伝えられた『イーリアス』からそれを解くのは困難に思える^{註4}。そこで背景にメネラーオスを主人公とした物語の存在が想定される。そしてそれは「メネラーオスの怒りの物語」であったと考えても不思議はない。先のパリスの怒りと同様メネラーオスの怒りも、アキレウスの怒りを主題とする『イーリアス』の詩人によって背景におしやられたのではなからうか^{註5}。

『イーリアス』ではその他の多くの武將たちも怒る。怒る場面のない武將のほうが少ないくらいだ。オデュッセウスも睨みつけ（*utropha iday* 第二歌245）、ディオオメデーダスも睨みつける（*utropha iday* 第十歌446）。イードメネウスも憤り（*khōlōquevos* 第二十三歌482）、小アイアースも立腹し（*khōlōquevos* 第二十三歌489）、アイネイアースは瞋恚を覚えていた（*thruēivē* 第十三歌460）。主だった武將たちの中で怒りの場面のないのは老将ネストール他僅かだ。

『イーリアス』の世界は様々な怒りに満ちている。

f 女性たち

『イーリアス』では女の登場人物も大きな位置を占めている。特にヘレネー、アンドロマケー、ヘカペー。しかしこの女性達が怒る場面はほとんどない。かろうじて怒りに近い感情が見られるのは、ヘレネーが戦場を逃れてきた夫パリスを非難する次の場面である。

「目を後ろにそらせて夫を責めてこう言った。『戦いを抜け出してきたのね、ほんとにそこで死んでしまえばよかったのに、私の元夫の勇士に討たれて。以前は、軍神の伴メネラーオスより力でも腕でも槍でも優っていると威張っていたのに』」(第三歌427～431)

この例を除くと、総じて『イーリアス』の女性主要登場人物は、怒りよりは容赦ない運命を前にした悲嘆や忍耐の役割を担っている。

ただ無名の女達については、怒りにまつわる次の一節がある。早く切り結んで雌雄を決しようとアキレウスに呼び掛けるアイネイアースのことばの中である。

「ならばどうして我々二人が互いに面と向かって罵り合
い、諍う必要があるのか、女みために。女どもは腹を立て
(χολαομένην) 命を蝕む諍いのために、互いに道の中に

出てきて相手を罵る、本当の事もそうでない事もなймаぜにして、怒りに(χολαο)とらわれての事だ」
(第二十歌251～255)

場末の情景にありそうな生活感溢れる譬喩である。

g アカイア人ら

もうひとつアカイアの一般兵士たちの怒りが語られる場面を見てみよう。

それはテルシーステースがアガメムノーンに悪態をつく場面だ。このテルシーステースという男は詩篇中の登場人物としてまったく異色の存在である。姿は醜悪、悪口雑言にたけ、王侯とも諍い厭わず、人を笑わせるためなら何でもする。もともと、言っている内容を聞いてみると、アガメムノーンの横取り行為を非難したり、的を射ているところもあるのだ。

「その時こんどは神の子アガメムノーンに、喚き散らしさ
んざん悪態をついた。彼にアカイア人らは大いに憤慨し
(νεμεισμένην) 立腹していった(koréōro)」
(第二歌221～223)

さてこの「彼に」は誰を指すか。テルシーステースを指すと
とる解釈が大勢のようだが、アガメムノーンを指すとする説も

ある。前者であればぐれ者の無軌道ぶりへの怒りであろうし、後者であれば権力者の横暴への怒りだろう。どちらとも決め難い。がここで、「怒り」の観点から興味深いのは、人の怒りが末端のはぐれ者にも権力の頂点たる総大将にも同じく向けられるという事実だ。怒りはその矛先たる人を選ばない。

「神々の怒り」

a アポローン

神々も怒りっぽい。詩編で最初に怒るのはアポローン神である。祭司クリューセースからの嘆願を聞き怒る。クリューセースの娘を返してほしいとの願いを邪慳にしたアガメムノーンに怒ったのだ。

「心に怒って (χολήσας) 弓と両蓋の矢筒を肩に負い、オリュンポスの頂から下った。怒れる (χολήσας) 肩のところで矢がからからと鳴った、かの神が進むにつれて」(第1歌 44～47)

このアポローンの怒りがアガメムノーンの怒りを介して主題であるアキレウスの怒りにつながっている。怒りの連鎖だ。

b ゼウス

第一歌でアポローンの次に怒るのがゼウスである。ゼウスとテティスとの談合の中味を詮索しようとする妻ヘーレーにこういうことばを放つ。

「なんとという女だ、いつも勘ぐり詮索する、だがどうあがいても思い通りにはいかないぞ。俺に疎んじられるだけだ、お前のためにならない。もしそれがそうなら、それは俺が望むところなのだ。黙って控えている、俺に従ってればいいのだ」(第一歌 561～565)

これは夫婦喧嘩における怒った夫のおなじみの言い草だ。高神夫妻が庶民夫婦とそっくりの口喧嘩をくりひろげるのもホメーロスだ。

第十五歌では妻に對しもつと怒る。色仕掛けでだまされたことに気付いたゼウスの怒りである。

「ヘーレーを怒ろしい目つきで睨んで (τροδοπα δαυ) 言った。『全くお前というやつはどうしようもない、悪巧みばかりして、ヘクトールの戦いの邪魔をし軍勢を敗走させたな。もう知らぬぞ、お前が真っ先に悪巧みの報いを受け、俺の鞭でたたか叩かれることになろうと』」

(第十五歌 13～17)

夫婦喧嘩が続いたが、むろん神ならではの怒りもある。

まず「ゼウス・クセイニコス Ζεύς Κεϊνικός(主客の誼の守り手たるゼウス)」としての怒りだ。それはメネラーオスのトロイア方を詰ることばの中に見られる。

「お前らが俺に働いた非道のかぎり、犬畜生め、お前らは雷鳴轟かずゼウスの激しい怒り(ἔμπε)をも心に恐れなかった、主客の誼の守り手ゼウスの(怒りを)。だがゼウスはお前らの町を滅ぼすことだろう。お前は私の妻と財宝をまんまとかつさらって逃げたのだ、妻のところまで歓待を受けておきなごら」(第十三歌 623～627)

主客の誼は『イーリアス』の世界においてもっとも重要な倫理の一つだった。その蹂躪は最高神ゼウスの怒りをこうむるのだ。

また「ゼウス・ヒケテーシオス Ζεύς ἱκετήσιος(嘆願者の守り手たるゼウス)」としての怒りもある。戦場でアキレウスに追い詰められたリュカーオンはそれを引き合いに出して命乞いをしようとする。

「お膝に縋ってお願いします、アキレウス様、私を憚り憐れんでください。あなたにとつて私は憚らるべき嘆願者です、ゼウスの子よ」(第二十一歌 74～75)

しかしこの命乞いは無駄だった。アキレウスはパトロクロスの死に対する怒り故聞く耳を持たなかった。リュカーオンはあえなく倒される。では、アキレウスはこのことにより「嘆願者の守り手ゼウス」の怒りをこうむったのかというと、そうではなかった。他にも同様命乞いむなく殺される例が多くある。どうも戦場にあつてはこの嘆願者保護の倫理は、藁をもつかむ側は持ち出しはするものの、適用除外であつたようだ。「戦場」と「陣屋」は違うのだ。というのも、同じアキレウスが息子ヘクトールに遺体乞い受けに自らの陣屋まで来たプリアモスに対してはこう言っているからだ。

「だから私の心をこれ以上一層の苦しみにへと掻きたてないでくれ、老人よ、お前を陣屋の中で嘆願者であるにもかかわらず許さないで、ゼウスの掟に背くことにならないように」(第二十四歌 568～570)

アキレウスも「嘆願者の守り手ゼウス」の怒りを憚っている。もうひとつ、潰走する軍勢の様を豪雨に流される土砂に喩える比喩の中にゼウスの怒りが出てくる。

「あたかもある秋の日、ゼウスが轟然と雨を叩きつけ、嵐のもとで黒い大地が一带うちひしがれるように、それはゼウスが人間どもに怒って (κοταράμενος) 痛めつけるとき

だ。人間どもが神罰を恐れず正義から外れて、集会で無理やり曲がった裁きをなしたとして」(第十六歌 384～388)

正義にもとる行為に対するゼウスの怒りだ。

このようにゼウスの怒りには、最高神の神威を示すものと思わず苦笑を誘う卑近な怒りとが共存している。

C ポセイドーン

ゼウスの弟、ポセイドーンを見てみよう。アカイア勢に加勢しようとするところを、引き返せとの兄ゼウスの命令を伝えられて怒ることばである。

「ゼウスが、同じ分け前同じ権能を与えられている俺に対して、腹立ちまぎれの (yoluroiati) 雑言で喧嘩を仕掛けてくるのにはいつも我慢ならない。しかし今のところは業腹ながらも (yeliourhēi) 譲っておこう」

(第十五歌 208～211)

と一応は矛を収めるのだが、「もしアカイア勢によるトロイア陥落を許さないならばそのときは」といって、こういう脅しを付け加える。

「覚えとくがよい、俺ら二人の間には癒しがたい怒り

(yoloi)があるだろうことを」(第十五歌 217)

ポセイドーンがトロイアを目の敵にするにはわけがある。トロイアのかつての王ラーオメドーンにひどい目にあつたことがあり、それを根に持っているのである。すなわち、ポセイドーンとアポロンは神でありながらラーオメドーン王のために一年契約で城壁工事を請け負い完成するのだが、報酬支払の時期がくるとラーオメドーンは踏み倒す、そればかりか、とポセイドーンは続ける。

「奴はわれわれ二人の両耳を青銅で削ぐうとさえたのだ。われわれは果たされない報酬のことで怒り (yolievoti)、恨みを抱いて (kekrototi) 帰って行ったのだ」

(第二十一歌 455～457)

神がなぜ人間に仕えたのか、詩人は「ゼウスに遣わされて」としか語らない。いずれにせよ、神が人間にここまで侮辱されれば根に持つのも無理はない。

神々にはそれぞれ鼻負する人間があり、土地がある。また憎悪する人間があり、土地がある。人々の間に諍いがあればそれは神々の間に諍いもたらす。人の怒りが神の怒りを呼ぶのである。

d ヘーレー

人間の女性はあまり怒らなかつたが、女神の最高神ヘーレーは怒る。ゼウスに対しても怒つてなかなか言うことをきかない。

「ヘーレーは怒り(yoloy)を胸に抑えきれずに言った。『畏れ多いクロノスの御子よ、なんということを仰います。私たちだつてよく知つてます、あなたの力には抗えないのです』しかしダナオイの戦士達が哀れでならないのです」

(第八歌 461～464)

アルテミスに対しても、トロイア側に加勢するとして怒る。

「ゼウスの畏い妃は怒つて(yolowaitiv)矢を降らす女神を罵り咎めた。『恥知らずの牝犬が、なんと私にはむかおうというの。私は力くらべするにはちよつと手ごわい相手だよ』(第二十一歌 479～482)

ヘーレーはその他、アポロン、アプロディーテーやクサントス河に対して怒っている。いづれもトロイア虜囚だというわけで。その点では単純なのである。神々の世界はときとして人間世界以上に単純である。

D. アキレウスの怒り

a アキレウスにとつての怒り

さていよいよアキレウスの怒りだ。

先にアキレウスは激情型の男だと述べた。ここでその意味を少し掘り下げてみたい。単に喧嘩つばやい性格、それを近代的な意味での個人的性格だといつていいものだろうか。確かにそういう側面もあるが、それだけでは済まされないものがあるうだ。

アキレウスを戦地へと送り出すにあたつてアキレウスをよく知つてゐるはずの父ペーレウスはこう訓戒した。

「息子よ、武勇はアテーネーとヘーレーとが与えてくれよう、もし両女神のお心に叶うならば。しかしお前は昂ぶる心を胸に抑えねばならぬ、和の心こそがよいものなのだ。禍のもとである争いは避けるのだぞ」(第九歌 254～257)

アガ멤ノーンはアキレウスを難じこう言う。

「お前が好むものといえは諍いや戦いや合戦ばかりなのだ」

(第一歌 17)

もつともこれは両者の罵り合いの最中のことばだから、いくらか割り引いて受け取らねばならないかもしれない。しかし僚友パトロクロスからさえこう評されている。

「あなたもよくご存知でしょう、神に守られたご老人よ、あの人がどんなに怖い人か。咎なき人をもすぐに咎めだてしかねない人です」(第十一歌653～654)

これらを見ると、アキレウスの怒りには、父親でさえ、刎頸の友でさえ、捉え難いものとしてある種の恐れを感じている。その怒りは性格からくるものというよりも、人間の持つ根源的な怒りなのではないかという感を抱かされる。アキレウスの人物造形には大理石の原石からようやく半分姿を現した彫像の印象がある。世知や制度の鑿をアキレウスは拒んでいる。アキレウスは自然人なのである。野蛮人という意味ではない。彼の鋭い弁舌や第二十三歌の葬送競技で見せる人間味をみると野蛮では決してない。取引や策略に無縁という意味での自然人である(その点オデュッセウスと好一対である)。自然人であるがゆえに不当に映るもの全てに怒りを覚えるのだろうか。そして自然人であるがゆえにその怒りは他の者たちのそれにまして純粹で激しいのだろう。

では、アキレウスの怒りは具体的にどう描かれているか、アガ멤noonに対する怒りとヘクトールに対する怒りについて

て見ていこう。

b アガ멤noonへの怒り

アキレウスのアガ멤noonに対する怒りは『イーリアス』全二十四歌中第一歌に始まり第十九歌まで続く。

まず最初にアキレウスが怒りをあらわにするのは次の場面だ。自分の分け前を神に返さざるを得なくなつて他人から代わりを巻き上げようとするアガ멤noonへの怒りだ。

「彼を睨みながら(ἰσθόραϊσθαι)足速いアキレウスは言った。『何を言う、恥知らずの強欲の徒が』」

(第一歌148～149)

その後怒り続けたアキレウスは、第十九歌にいたつてようやく次のようにいう。

「しかしすでに起こったことは辛いことではあるが放つておこう、自分の心をやむなく胸の中におさめて、今は私は怒り(ῥόλον)を止めよう。いつまでも執拗に怒り続けている(ἠεὐρανεύειεν)べきではない」(第十九歌65～68)

このアキレウスの怒りの理由は何だったか。敢えて一言でいえば、アガ멤noonの不当な振舞い故、すなわち女奴隷を横

取りされた故に怒ったのだ、ということになる。が、アキレウスの怒りを惹起したアガメムノーンの不当な振舞い、振舞い自体は一つだが、その振舞いがアキレウスにとって持つ意味は単純に一つではない。幾層もの意味が絡み合っている。その幾層もの意味合いとはなにか、少し吟味してみよう。

第九歌においてアキレウス自らがその怒りの理由を述べている。それは和解を勧める使節団に対する答えとして百を超乎詩行にわたって語られたものだ。その中でまず目にとまるのは次の一節である。

「アルゴス人達がトロイア人達と戦うのは何のためなのか、アトレウスの子がここまでアルゴス人達を引き連れてきたのは何故なのか、髪麗しきヘレネー故ではなかったのか、この世の人間の中で妻を愛するのはアトレウスの子だけか、いっばしの心ある男ならば妻を愛し大事にするもの、私もそうだ」(第九歌37〜342)

ここには二つの理由が複合して述べられている。すなわち、アガメムノーンの振る舞いは、先ずアキレウスの「夫婦愛の破壊」をもたらすものだった。と同時にそのことはトロイア遠征の「大義の虚構性」を暴くものだったのだ。

さらにアキレウスは言う。

「だが私の心は怒りで(ἔμπε)膨れ上がるのだ、アトレウスの子が私のことをアルゴス人たちの面前でまるで卑しい浮浪者か何かのように無礼に扱った、その時のことを思い出すたびに」(第九歌646〜648)

名譽は勇士アキレウスにとって最高の行動原理だった。それが何たる侮辱、この「不名誉」が「夫婦愛の破壊」、「大義の虚構性」と並んで怒りの三つ目の理由として挙げられる。

そして更に、アキレウスの言葉に注意深く耳を傾けると、もう一つの潜在する理由が浮かび上がってくる。それは「権力への不信」である。詩編冒頭での諍いの時、アキレウスはすでに次のように言っていた。第九歌でもほぼ同内容を繰り返して述べている。これは一貫する思いだったのであろう。

「激しい戦闘のほとんどを遂行するのは私の手なのだ、ところがさて分配の段になると御身の取り分がずつと多くて、私はいえは僅かなものを大事に持って船に帰るのだ、散々戦に疲れ果てて」(第一歌166〜168)

自然人アキレウスは実力を尊ぶ古い人間である。アガメムノーンが代表する実力を離れたところで成り立つ権力構造をよしとしていない。その権力構造を前提とした配分原理に納得していない。それでも、本意ながらも体制に反旗を翻すことなく

参戦してきた。それは名誉を得るためでもあつたらう。しかしそれも権力者がしかるべき節度を保っている場合の話である。権力者が権力をかさに横暴を働くときには、溜まっていた「権力への不信」が権力者への怒りとなって表れるのだ。

アキレウスが怒っている間、トロイア勢に追い詰められたアガ멤ノーンは折れて来た。償いを差し出して和解を申し入れたが拒否されたのだ。その事情はやはり第九歌でつぶさに語られている。その時のアキレウスの頑なな態度は、アイアースの次の言のように、当時の慣習にもとるものであつたかもしれない。

「無情な奴だ、世の中には殺された兄弟や子の償い代を受け取る者さえいる、そして下手人は沢山の補償をしようえで国に留まる。殺された方の側も昂ぶる心情を抑えるのだ
償い代を受け取って」(第9歌 632～636)

しかしこの時のアキレウスには、慣習云々は何の説得力も持たなかった。

その後、アガ멤ノーンへの怒りの帰結は意外なところからやってきた。そして一気に終息する。怒りのエネルギーが別の方に向けられたのである。

c ヘクトールへの怒り

さてこのアガ멤ノーンに対する怒りに入れ替わったヘクトールに対する怒り、その理由は何だったか。それは言うまでもなく愛する友バトロクロスを奪ったこと、「友情の破壊」に対する怒りだった。

アガ멤ノーンに対する怒りは、主にその原因に吟味すべき重点があつた。怒りの帰結の方は意外なところからやってきたが明快だったからだ。ヘクトールに対する怒りは好対照だ。原因は明快、「友情の破壊」だ。しかしその帰結については吟味すべき多くのことがありそうだ。

このヘクトールへの怒り、これはどのように帰結したのか。怒りから復讐の念に駆られたアキレウスは、ヘクトールを殺し、それだけではすまずに屍を戦車につないで引き回す。それでもやむことはない。そこでプリアモスの遺体乞い受けである。プリアモスのもたらした補償を受け遺体返還に応じる。アキレウスは怒りを解いたので。最後にこの大団円の意味について怒りの観点から改めて考えたいと思うのだが、その前にこの最終第二十四歌の大団円の伏線ともいふべきものに目を向けてみる必要がある。

それは最終歌に先立つ第二十三歌にある。この歌ではバトロクロスの葬送競技が歌われる。種目は競馬、拳闘、相撲、徒競争、武術、鉄塊投げ、弓術、槍投げである。もつとも最後の槍投げにおいてアキレウスは、競技を行わずしてアガ멤ノーン

の優勝を認めている。これはアガメムノーンへの怒りの消滅の証だろう。それはそれとして、ここで問おうとするのはヘクトールに対する怒りの解消に向けた伏線である。

これら競技の描写はいずれも生彩に富み興趣をそそるが、その中で二つのエピソードに注目したい。

一つはイードメネウスと小アイアースの諍いの場面だ。競馬でイードメネウスが折り返してくる馬を遠望して「トップは本命ではない」という、それに対して小アイアースが「おいはれの出番ではない、でたらめをいうな」といつて諍いを始める。そこに割って入ったのがアキレウスである。

「もうこれ以上口汚く罵り合うのはよせ、イードメネウスにアイアースよ、みっともないそんな風にしてる奴を見たら御身らも怪しからんと思うだろう」(第二十三歌492～494)

あの怒りつぱく今も怒りに身を任せているはずのアキレウスのことばである。アキレウスの心の中で(おそらくは意識下で)微妙な変化が起こりつつあるように感じられないだろうか。

もうひとつのエピソードは競馬が終わってアンティロコスとメネラーオスとが着順をめぐる争う場面である。アンティロコスは二着でゴールしたのだが、鼻の差で三着となったメネラーオスが怒って強烈に異議を申し立てる。アンティロコスは進路妨害をしたと。それは事実だった。その申し立てにアンティ

ロコスはこういつて率直に非を認める。

「堪忍してください、私はあなたよりずっと若輩なのです。若者の無軌道がどれほどかご存じでしょう、せつかちで思慮は浅いのです。ですから堪忍してください、このいただいた(二等賞品の)馬は差し上げます、更に家から別のより大きな品を持つてくるようお望みなら、すぐにでも差し出しましょう、神に守られたあなたにいつまでも憎まれ神意にもとることになるよりは。」こういうとネストールの子は馬を引いていつてメネラーオスの手に渡した、

(第二十三歌 587～596)

これに対するメネラーオスの反応も率直なものだった。

「すると彼の心は和らいだ、あたかも畑に麦が生い茂るときに実った麦の穂の上に露が降った時のように」

(第二十三歌 597～599)

そしてメネラーオスも怒りをおさめ、二等を譲る。

この間アキレウスは何も介入しない。この間のアキレウスについて詩人は何も語らない。しかしアキレウスがこの二人のやり取りの一部始終を間近に見ていたことは間違いない。何を感じ取っていたか。アンティロコスのいかにも血気盛んな若武者

振りにアキレウスは前から自身の姿を見ていただろう。それだけにこの場での彼の真率な態度に感ずるところがあったと思われる。そして一方の真率さが他方の真率さを惹起し、さらには双方の真率さが怒りの支配する一場の緊張に急転直下の解決をもたらしたこの成り行きに、アキレウスはある種の感慨を抱いたのではなからうか。この場面を微笑しながら見届けているアキレウスの姿が髣髴とする。

この様なアキレウスの像は競技開始以前には想像だにしえないものだった。葬送競技は死者にバトロクロスの霊を弔うための催しであったが、生者アキレウスの頑なな怒りに微妙な影響を与えたようだ。これらの伏線のアキレウスの意識下への投影が、最終歌でのプリアモスのことばを受け入れる彼の心にながっているのではなからうか。

しかしながらアキレウスの怒りはまだ止んだわけではない。最終歌冒頭ではまだヘクトールの屍を三度まで引きづり回す。

そこでプリアモスの登場である。息子ヘクトールの遺体乞い受けに来たプリアモスは開口一番こう言う。

「神にもまじうアキレウスよ、お父上のことを思ってください、私と同じ年頃の忌まわしい老境にあるお父上を」

(第二十四歌486～487)

そしてさらに、

「お父上はあなたが生きていることを知って心で喜び、日々待ち望んでおられるでしょう、トロイアから帰ってくる愛しい息子を迎えることを。それに引きかえ不運の私は、広いトロイアの地で多くのすぐれた子を生みながら、誰も残っていないのです」(第二十四歌490～494)

と続ける。

プリアモスは知ってか知らずしてか言わないが、アキレウス自身は自分がトロイアで死ぬ運命でありもはや故郷への帰還のかなわぬことを知っている。プリアモスのことばから、アペーレウスが遠く息子の死を知って悲嘆にくれる様を痛切に思い描いたであろうことは想像に難くない。アキレウスは父ペーレウスの悲嘆を悲嘆する。するとどういうことが起こるか。子を失った悲嘆をプリアモスとペーレウスとが共有しているとすれば、ペーレウスの悲嘆を悲嘆しているアキレウスは、プリアモスとも悲嘆を共有している。アキレウスとプリアモスとはもはや敵仇ではない、悲嘆するもの同士なのだ。同志と言っていいかもしれぬ。

大団円の意味はそこにあるのではなからうか。たしかに、遺体引き渡しはゼウスの意思だった。ゼウスの意思を聞かされたアキレウスは

「そうしましょう、償い代を持ってきた人に遺体を引き取らせましょう、オリュンポスの大神（ゼウス）が本気でそう命ぜられるのなら」（第二十四歌139～140）

といており、遺体を引き渡す気になったのはゼウスの意向に従ったものだ。しかし遺体引き渡しと怒りを解くこととはまた別のことだ。

「二人はそれぞれの思いを胸に、一方は戦士の殺し手ヘクトール故にアキレウスの足下に伏して激しく泣き、他方アキレウスは自分の父親をかつはパトロクロスを偲んで泣いた。二人の泣き声が部屋中に響き渡った」

（第二十四歌509～512）

アキレウスの抑えがたい怒りがやむのは、同じ悲嘆を持つ者と共に泣くことによってだった。

おわりに——なぜ怒りか

『イーリアス』は怒りに満ちている。しかし、怒りに満ちているのは『イーリアス』の世界だけだろうか。

ここで自分達自身の怒りについて省みずにはられない。私達は怒る、伴侶に対して怒る、子に対して怒る、ときに上司、同僚、周囲の人に対して怒る。プライン管の向こうや、マスコミに対しても怒る。政治や他国に対しても怒ることがある。それほど怒りっぽい人でなくとも、一日に一度も、とはいわないまでも、週に一度も怒りを覚えないことは稀だろう。それに、アキレウスではないが、怒りが何日も続くこともあるはずだ。程度の差こそあれ怒りに無縁の人はいないのだ。

怒りは人を蝕む。相手を害することを求め、行き着くところ生命をさえ奪いかねない。相手だけでなく自分自身をも蝕む。怒りにそれほど長くない生の貴重な時間を費やす。むなしく費やすのみならず、それを「おぞましい」（第一歌2）色で塗りつぶす。まさしく怒る人自身の「命を蝕む」（第二十歌253）のだ^{註5}。

世界の歴史を見ても、『イーリアス』の時代以来三千年、怒りがもたらす対立、紛争、戦争は途絶えることがなく、それがために多量の血と涙を流してきた。

なぜ人類最初の詩篇は怒りを主題としているのか。この初めの問いに返ろう。

文明の黎明期にあつて詩人は、怒りは人間の宿命だと認識していた。宿痾と言うべきかも知れない。そしてその上でこういうことを問いかけようとしているのではなからうか。即ち「人間は怒りを避けない、時として破滅の結果さえもたらす。人

間は、あるいは文明は、怒りを制御することができるか」と。
 プリアモスが、十一日間のヘクトール葬儀のための休戦を願
 い出た後、アキレウスに語った最後のことはこうだ。

「十二日目にはまた戦端を開きましょう、やむを得ないなら
 ば」（第二十四歌667）

はたして本当に「やむを得ない」のであろうか。

註

【1】 *trópa isav* に近い日本語表現として「上目づかいに」がある。しかし、「上目づかいに」には甘えや媚びのニュアンスもあるので少しずれる。視線の向きは逆になるがむしろ「睨みつけ」の方が意味は近い。視線の向きも意味ももっとも近いのは、ヤクザ世界の聊か特殊な表現ではあるが、「睨（ね）め上げて」であろう。

【2】 用例数は *A Complete concordance to the Iliad of Homer* (Marzullo, Georg Olms Verlag 1971) に 249。ちなみに *trópa isav* の使用回数は17回である。

【3】 『ギリシア叙事詩の誕生』（松本仁助、世界思想社、一九八九年）

この書で著者は、『イーリアス』の古い層として「勇者パリスの物語」の存在を想定している。すなわち、まず第6歌でヘクトールがなぜ戦列を離れ帰城したのかその目的を問う。

帰城してヘクトールが行ったことは、「①アテネへの祈りを捧げるよう命じる」「②パリスに戦列復帰を促す」「③アンドロマケと別れのことばを交わす」の三つである。このうち①は伝令を派遣すれば充分だし、③は個人的理由であり戦場を預かる武将のすることではないので、いずれも主目的たりえない。残るは②しかないが、現行『イーリアス』の懦弱なパリスであれば戦列復帰させる意味がない。そこでトロイア軍にとって不可欠の存在「勇者パリス」の物語が想定されるとしている。私はこの想定に賛成であり、その「勇者パリスの物語」における主要主題はおそらく「パリスの怒り」であったのではないかと思う。

【4】 「二人稱と呼格と——イーリアスの語り」（満田郁夫、明治学院大学言語文化研究所『言語文化』一九九七年所収）

この論考において著者は、『イーリアス』中の二人稱の呼びかけの実例につきつぶさに検討を加えその意味合いを吟味している。メネラーオスの七例について著者の検討結果は本稿筆者の理解するところ以下三グループに分けられる。

① 緊迫した場面で、詩人が時空を超え戦場の現場に参じた（該当詩行：4—127、4—146、7—104）

② メネラーオスの良さが出ている場面で、詩人が感情移入した（17—679、17—702、23—600）

③ 理由不明。著者が、「特別に詩人によって呼びかけられねばならない訳がよく分らない」と疑問を提起している例。（13—603）

大変興味深い分析であり、（他との比較ぬきに）メネラーオスに限ってみれば正鵠を得ていると思われる。しかし『イーリアス』全体の中で見ると、①については緊迫した場面は上

記に限らないし、②については詩人が好ましい者として描いた人物は（ヘクトールやアンティロコス等）他にもいる。やはり、現行『イーリアス』全体の中でメネラーオスの存在感は、（③の例に限らず）他に抜きんで「特別に詩人によって呼びかけらねばならない」ほど強くないのではないかと印象を禁じえない。

【5】「パリスの怒り」にせよ「メネラーオスの怒り」にせよ、その『イーリアス』に先行する伝承の痕跡が、『イーリアス』の中で発展、同化、解消されないまま、いわば異物として残っているとしたら、それは作者の不幸際ではないかという指摘がありうる。

ホメーロスが、比類なき詩人であったと同時に、先行伝承

に関わる傑出した編集者であったことは疑いを入れない。しかしこの点に限らず、詩編の細部において齟齬が全くないわけではない。「よきホメーロスも時には居眠りす」

【6】『イーリアス』力の詩篇（シモーンヌ・ヴェイユ）の次の一節が想起される。

「これこそが力の特質だ。それが持つ人間を物に変える働きは二重であり両方に及ぶ。即ち、それを蒙る者の魂と蒙らせる者の魂とを異なつたやり方で、しかし同様に石と化するのだ。」

この一節の「力」はそのまま「怒り」に置き換えることができる。